やぶなべ

青森県立青森高等学校生物部 発行

誌　　名	やぶなべ
号/発行年/頁	24･25 / 1978-1979 / 35-44
タイトル	野内川流域の昆虫相（補遺）
著　者　名	市田忠夫

自然を見つめる やぶなべ会（青森）

野内川流域の昆虫相（補遺）

3年　市田　忠夫

当青森高校生物部が青森市東部を北流し陸奥湾に注ぐ一級河川野内川流域の生物相を総合的に調査し始めてから今年（1978年）で6年になる。その間に記録された昆虫綱632種は全種、前号である“やぶなべ23号”に掲載されている。そこで本24号では今年初めて記録された種、初めて同定された種の紹介と、前23号までに記録されていた種の再検討、及び一部の考察を行う。本年度新たに記録された昆虫は筆者の怠惰等により僅か10種弱であるが、佐藤・葛西（1978）の青森県の蛾（I）で滝沢（主として小川目沢のことであるという）から記録されているシャチホコガを既記録のものを除き、佐藤氏の承諾の下に紹介する。またやぶなべ会の山道忠郎氏らは最下の支流辺田貝沢でイボタガ等多数の蛾を記録しており、筆者自身も標本を実見しているが、今手元にデータがないので割愛する。

ナナフシ目　PHASMIDA

トビナナフシ科　Necrosciidae

トビナナフシ　Micadina phluctaenoides Rehn

4－Ⅷ－1978　1♀　下折紙沢　加賀谷康人・市田

下折紙沢のキャンプ地で加賀谷氏の体に飛来したものを筆者が採集した。

鱗翅目　LEPIDOPTERA

ドクガ科　Lymantriidae

キアシドクガ　Ivela auripes Butler

9－Ⅶ－1978　1♂　辺田貝沢　市田

マイマイガ　Lymantria dispar postulba Inoue

3－Ⅷ－1978　1♂　滝沢　市田

シャチホコガ科　Notodontidae

序文でも述べたように、以下に示す種は再検討のバイバラシャチホコを除き全て、佐藤博・葛西充（1978）青森県の蛾（Ⅰ），誘蛾燈No.72 33-39に発表されたものである。データは割愛してあるので、興味のある人は直接上記の報文を参照されたい。

シャチホコガ　Stauropus fagi persimilis Butler

ホソバシャチホコ　Fentonia ocypete Bremer

オオアオシャチホコ　Quadricalcarifera viridipicta himiko Nakamura

バイバラシャチホコ　Cnethodonta baibarana Matsumura

7-Ⅷ-1977　1♂　樺ハギ沢　市田

"ヤぶなべ23号"にシロシャチホコ（C. grisescens）として記録された個体であるが、佐藤博氏より「シロシャチホコとバイバラシャチホコは近似であり、その区別には末端腹板の精査を要する。青森ではバイバラシャチホコのほうが多い。」との教示を受け、上記個体を検したところバイバラシャチホコであった。ヤぶなべ23号に記録されたシロシャチホコはバイバラシャチホコに訂正する。

シロテンシャチホコ　Urodonta viridlxta Bremer

アカシャチホコ　Gangaridopsis citrina Wileman

トビスジシャチホコ　Notodonta rothschildi Wileman et South

マルモンシャチホコ　Peridea moltrechi Oberthur

オオウグイスシャチホコ　Suzukiana cinerea Butler

カエデシャチホコ　Semidonta biloba Oberthur

スジエグリシャチホコ　Ptilodon hoegei Graeser

エゾエグリシャチホコ　Ptilodon yezoensis longipennis Inoue

エゾクシヒゲシャチホコ　Ptilophora jezoensis Matsumura

キエグリシャチホコ　Himeropteryx miraculosa Staudinger

コトビモンシャチホコ　Drymonia japonica Wileman

ヤスジシャチホコ　Epodonta lineata Oberthur

シロジマシャチホコ　Pheosia fusiformis Matsumura

オオギンモンシャチホコ　Spatalia doerriesi Graeser

オオエグリシャチホコ　Pterostoma sinicum Moore

ヒナシャチホコ　Micromelalopha troglodyta Graeser

ヤガ科　Noctuidae

シマカラスヨトウ　Amphipyra pyramidae Linne

11 - VIII - 1976　1♂　樺ハギ沢　市田

以上のデータの下に採集し、単に色彩斑紋、開張などによりオオシマカラスヨトウと同定し、やぶなべ22号及び23号に記録したものであるが、佐藤氏より、本県からはまだオオシマカラスヨトウの記録はないという示唆をいただき、両種の確実な区別点である雄ゲニタリアのコルヌティ（cornuti）をゲニタリアより取り出し検鏡したところ、シマカラスヨトウの誤同定であることが解った。やぶなべ22，23号のオオシマカラスヨトウの記録は本種シマカラスヨトウに訂正する。

鞘翅目　COLEOPTERA

ハネカクシ科　Staphylinidae

キイロハナムグリハネカクシ　Authobuim parallelum Sharp

1 - V - 1977　3 ex.　下折紙沢　市田

ハナノミダマシ科　Scraptiidae

タケイフナガタハナノミ　Anaspis takeii Chujo

1 - V - 1977　2 ex.　下折紙沢　市田

以上の2種は共に残雪を割って咲いていたシュンラン（春蘭）の花より得られたもので、他にも非常に多くの個体が訪花していた。

カミキリモドキ科　Oedemeridae

ツマグロカミキリモドキ　Nacerdes melanura Linne

4-Ⅷ-1978　1 ex　下折紙沢　市田

カミキリムシ科　Cerambycidae

ナガバヒメハナカミキリ　Pidonia signifera Bates

筆者は本種を"やぶなべ22, 23号"に記録したが、これはニッポンヒメハナカミキリの誤同定であった。これについては後述する。

ミヤマルリハナカミキリ　Anoplodera azumensis Matsumura et Tamanuki

28-Ⅴ-1978　1♂　辺田貝沢　市田

タテジマハナカミキリ　Parastrangalis cikokensis Matsumura

本種も"やぶなべ22, 23号"に筆者により記録されており、22号では近似のニンフハナカミキリとの区別点まで書いているが、その後標本を精査したところ多少触角の暗化したニンフハナカミキリの誤同定であることに気がついた。22, 23号のタテジマハナカミキリの記録はニンフハナカミキリに訂正する。

ホソキリンゴカミキリ　Oberea inclusa infranigrescens Breuning

25-Ⅵ-1978　1♂　辺田貝沢　市田

ハムシ科　Chrysomelidae

クロナガハムシ　Orsodaene arakii Chujo

23-Ⅴ-1976　多数　上折紙沢　市田

本種は1976年5月23日、上折紙沢に於いてカエデの花上より多数得られ、本種と同定したのであるが、図鑑にその分布が本州中央高地帯と記されていたので"やぶなべ"誌上への記録を保留していたもの。その後いろいろな図鑑類を調らべたが、他に該当する種もないので、本種として当24号に記録する。本種は一見樹上性のゴミムシのような特異な形態をしており個体変異の幅も非常に広い。

双翅目　DIPTERA

アブ科　Tabanidae

メクラアブ　Chrysops suavis Loew

25－Ⅶ－1978　1♀　辺田貝沢　市田

キモンアブ　Hybomitra montuna Meigen

25－Ⅶ－1978　1♀　辺田貝沢　市田

以上34種を加減して、野内川流域から記録された昆虫類は18目141科661種になる。

考　察

Pidonia属

Pidoniaに属するハナカミキリは当地域から次の5種が記録されている。

フタオビチビハナカミキリ	Pidonia(Ompllodera) puziloi
ニッポンヒメハナカミキリ	Pidonia(Pidonia) japonica
セスジヒメハナカミキリ	Pidonia(Pidonia) amentata kurosawai
ミワヒメハナカミキリ	Pidonia(Pidonia) miwai
チャイロヒメハナカミキリ	Pidonia(Mumon) debilis

他に本県からは、ナガバヒメハナカミキリ（P.(P.) signifera)，キベリクロヒメハナカミキリ（P.(P.) maculithorax），ヨコモンヒメハナカミキリ（P.(P.) insturata)，ムネアカヨコモンヒメハナカミキリ（P.(P.) masakli）が記録されている。内、ナガバ（以下ヒメハナカミキリ略）の分布は疑問である。筆者自身も"やぶなべ22，23号"の時点に於いては、他の報文に従い、本県にもナガバが産するものとして、ニッポン（以下ヒメハナカミキリ略）の雌の暗化程度の弱い個体、すなわち鞘翅会合紋が小盾板に達しない個体をナガバと同定していた。しかし、1977年6月18・19両日に下折紙沢を中心に採集し現在手元にあるナガバ－ニッポン群のPidonia（以後これをsignifera－complexと呼ぶ）の標

本376♂107♀の鞘翅斑紋を検したところ、ナガバに近いものからニッポンに近いものまで非常に広い変異幅を持ち、しかも互いに連続していた。さらに、筆者所蔵の確実にナガバと同定される山梨県大菩薩産の1♀（この個体は暗化傾向が強く、一見ニッポン♀のようである）と比較してみた。肉眼や低倍率のルーペでは、両者の区別点である前胸の形や前胸及び前翅の点刻などの違いをはっきり認めることはできなかった。そこで、スンプ法により写し取った両者の前胸背板及び鞘翅の点刻を検鏡したところ、初めて両種間に有意の差が現われた。しかも、流域内の個体は色彩斑紋的に最もナガバ的であるもの10個体以上検鏡したが、相互間に有意の差はなく大菩薩産ナガバとは明らかに差が認められた。これにより流域内のsignifera-complexは全てニッポンであることが確められた。考えてもみれば同一の時空間（生物学的な表現ではないが）にsignifera-complexのような極めて近似の異種どうしが存在することはなく、いわゆる棲み分け（空間的・時間的）が見られるわけである。また草間（1973）のいうようにニッポンが単にナガバの北部亜種に過ぎないなら、まして同時に採集することは考えられない。またHayashi（1968）の一部を原文のまま抜粋すると —— the species (= P. signifera) seems to be not found from very higher altitude and N. Honshu —— とあり、本州北部に於けるナガバの分布については否定的である。さて、現在筆者の手元や部にある文献から青森県及び近県のsignifera-complexの記録を紹介し、それについて検討を加えてみよう。

1、青森県立郷土館（1973）青森県立郷土館報 No.1 P13

ナガバ　冬部沢（24-Ⅶ-1973）

ニッポン　袰内（9-Ⅷ-1973）

2、青森県立郷土館（1974）青森県立郷土館調査研究年報 No.1 P.31・42

1973年に加えて

ナガバ　南股沢（6-Ⅷ-1974）

3、佐藤明（1974）平賀町におけるカミキリムシ科　ウバタマ13号　P10

ナガバ　　平賀町新屋（29－Ⅴ－1972, 5－Ⅵ－1972, 20－Ⅴ－1973,

26・27－Ⅴ－1973, 3－Ⅵ－1973）

ニッポン　　平賀町新屋（29－Ⅴ－1972, 20－Ⅴ－1973, 3－Ⅵ－1973,

11－Ⅵ－1973）

4、秋田高校生物部昆虫科（1960）八幡平昆虫目録　ばっけ10号　P5

ナガバ

5、秋田高校生物部昆虫科（1964）昆虫目録　ばっけ14号　P25

ナガバ　　蒸の湯

以上の記録について考察する。まず4の記録であるが、Ohbayashi et Hayashiによってニッポンがナガバより分離されたのは1960年であり、1960年発行の"ばっけ10号"を書く時点では一般の高校生は両種を混同していたであろうと推定される。さらに、八幡平にはニッポンのパラタイプの産地である岩手山が含まれる。以上のことから4の記録はニッポンの誤同定と思われる。また5の記録であるが、北隆館の原色昆虫大図鑑Ⅱが前年に発行されてはいるのだが、着稿時点でその図鑑が広く流布していたとは考えられず、4と同様の理由で、ニッポンの誤同定と思われる。次に3であるが、3に含まれるナガバ5例、ニッポン4例の採集データの内3例までも同じで、極く近似の種どうしは同一の時空間に在存しえないという理由から、これもニッポンの無理な同定によるものと思われる。本文を読むとニッポンよりナガバのほうが個体数が多いように書いている。あるいはニッポンの♀やab. satoiをナガバと同定したのかもしれない。ただ3を記録した佐藤氏は同定の解らないものは下山健作氏にお願いしたと書いている。下山氏はご自身で十和田より多数のニッポンのパラタイプを採集された方であるので、佐藤氏が下山氏にナガバとニッポンの同定をお願いしたものであると、3の記録を否定することが少々困難となってくることは否めない。さて最後は1・2の記録である。昨年（1977年）筆者はこの筆責者を推定により阿部襄氏としたが、明記されていないので"やぶなべ23号"の

文献の阿部東の所から1・2を除く。この1・2のデータは県立郷土館の"津軽半島西北部山塊の自然調査"によるもので、下山健作氏も調査員に加わっておられる。したがって1・2のデータを否定することはかなり困難であると思うが、2ではナガバの分布に北海道まで加えているのが多少気になる。筆者の知る限りにおいてはsignifera-complexは北海道に分布せず、北海道の分布域の達するPidoniaはフタオビ4ビハナカミキリとセスジヒメハナカミキリの2種のみである。最近になって北海道のファウナにsignifera-complexが加えられたのかは、筆者の勉強不足のため知り得ない。対馬暖流に沿い、日本海側の平野部を伝って津軽半島までナガバが北上しているのかも知れないが、途中には鳥海山（2230m、ここにはf. chokaiという特殊なニッポンが分布する）を中心とする丁岳山地、白神岳（1232m）・田代岳（1178m）を中心とする白神山地が自然の大障害物として存在し、ナガバの北上は困難ではないかと思われる。signifera-complexについては北海道西南部、東北、北陸、北関東の各産地のものを検する必要があるので、ここではこれ以上の論究は行なわないことにする。

次に、Pidonia 5種の中でも特に個体数の多いセスジヒメハナカミキリについて記す。青森をはじめ東北・北海道のセスジヒメハナカミキリはssp. kurosawaiとされることが多い。ssp. kurosawaiの特徴は鞘翅会合紋が小楯板に達せず、他の黒斑の発達も弱いということであるが、野内川流域で採集された多数の標本を見ると、中には原名亜種（ssp. amentata）とはっきり区別できない個体が含まれ、♀についてのみいえば、Hayashi（1968）に示されるようなLp紋の退化した個体は見られない。原名亜種を実見していないので何ともいえないが、ssp. kurosawaiは単なる型すなわちf. kurosawaiに降格させられるべきものかもしれない。

Pidonia属の最後にミワヒメハナカミキリについて述べる。ミワヒメハナカミキリは流域内からは1977年6月18・19日に採集された3♂4♀の記録しか筆者は見ていないが、中の1♂は黒色部の発達が極めて弱く、あたかも4ョウジ

ヨウヒメハナカミキリ♂のような外見を呈している。

クロハナカミキリ　Leptura aethiops

日本産のクロハナカミキリには2亜種あることが知られている。すなわち、♀の前胸背の赤いssp. dimorphaと♀の前胸も黒いssp. aethiopsであり、前者は本州・四国・九州の平地から山地まで分布し、後者は北海道及び本州の高地帯に分布する。この内、野内川流域から記録された個体は全て前亜種ssp. dimorphaであった。先頃、八甲田大岳の約1400mの地点で採集された個体3♂2♀を見る機会を持ったが、この個体はssp. aethiopsであった。このことから少なくとも本県の山岳地帯にはssp. aethiopsが産するということに疑問はない。そこで、野内川流域内の最高峰である折紙山（920.6m）の山頂付近にはどちらが分布するのであろうか。折紙山は全く未調査なので何とも言えないが、ssp. aethiopsである可能性もある。というのは、折紙山ではキベリタテハやエルタテハといった山地性の蝶が発生しているようであるからである。この2種の山地性蝶は共に夏期に於いてでさえ流域内で目撃され、キベリタテハは最近でも1978年8月に、三橋渡氏によって樺ハギ沢付近より同時に2頭採集されている。折紙山の調査は今後の課題であるが、そこから採れるクロハナカミキリはどちらの亜種であろうか。

文　献

今回使用した文献は、ほとんどが23号に載せてあるので、この24号では、今回新しく参考に用いた文献、考察の部分で使用したものについてだけ記す。

秋田高校生物部昆虫科（1960）八幡平昆虫目録．ばっけ10，2－9．

――――（1964）昆虫目録．ばっけ14，24－45．

青森県立郷土館（1973）津軽半島西北部山塊の自然調査　第1次調査概要　昆虫関係．青森県立郷土館報1，11－15．

――――（1975）津軽半島西北部山塊の自然調査　第2次調査概要　昆虫．調査研究年報1，21－46．

Hayashi, Masao (1968) A Monographic Study of the Lepturine Genus <u>Pidonia</u> Part I.　研究紀要3，1－61．

市田忠夫（1978）野内川流域の昆虫相．やぶなべ23，35－100．

草間慶一（1959）日本産カミキリの一覧表．新しい昆虫採集（下）．内田老鶴圃新社，東京．

――――（1973）日本産カミキリの生態と分布一覧表．新しい昆虫採集案内（III）内田老鶴圃新社，東京．

中根猛彦（1975）学研中高生図鑑　昆虫II　甲虫．学習研究社，東京．

佐藤明（1974）平賀町におけるカミキリムシ科．ウバタマ13，8－22．

佐藤博・葛西充（1978）青森県の蝶（I）．誘蛾燈72，34－39．

（以上著者別ABC順）